

開港の

ひろば

YOKOHAMA
ARCHIVES
OF
HISTORY

Number

155

横浜開港資料館
発行日 / 2023(令和5)年10月5日



特集 関東大震災100年

p.2-3

特集「関東大震災100年」 古き横浜の壊滅 - O.M.プール旧蔵資料より

p.4-7

特集「関東大震災100年」 横浜連合婦人会による罹災者救護活動

p.8-9

ミニ展示

p.10-12

トピック / 閲覧室より / 資料館だより

古き横浜の壊滅

- O.M.プール旧蔵資料より

一九三(大正三)年九月一日に発生した関東大震災から、今年(二〇三三年)でちょうど一〇〇年を迎える。横浜では、三万五千棟を超える家屋が倒壊・焼失し、二万六千人を超える死者・行方不明者が出たが、この大災害を生き抜いた人びとのなかには、のちに横浜での震災体験を手記として残した人がある。イギリス系貿易商社ドッドウエル商会で日本総支配人を務めていたアメリカ人オーティス・マンチェスター・プール(Otis Manchester Poole, 1880-1978、図1)もその一人である。

大地震が横浜を直撃したとき、山下町七二番地(現・ホテルJALシティ関内所在地)の社屋(図2)で勤務中であつたプール(以下、当時の愛称チェスターで表記する)は、瓦礫の山と化した市街地の惨状に衝撃を受けながら、社員たちと別れて家族の安否を確認するために山手の自邸へと向かった。そして先に避難して無事であつた妻ドロシーと三人の子どもたちとともに、イギリス海軍病院の敷地(現港の見える丘公園所在地)から崖を下りて新山下の埋め立て地へと逃れ、当時横浜港に停泊していた客船エンプレス・オブ・オーストラリアに救助された。

チェスターはこのときの体験を手記として書き残し、のちに『The Death of Old Yokohama』(一九六八年)と題して刊行した。一九七六(昭和五二)年

には、同書の日本語版『古き横浜の壊滅』が有隣堂から刊行されている。

当館では、二〇〇五(平成一七)年にチェスターの次男リチャード・A・ブル氏から関係資料をご寄贈いただいた。これらの資料の一部は、関東大震災

九〇年の機会に開催した企画展『被災者が語る関東大震災』(二〇三三年)でも紹介したが、チェスターやドロシーが家族に宛てた手紙やチェスターによる震災体験の手記、横浜港で罹災者の救助にあつた客船エンプレス・オブ・オーストラリアのロビンソン船長が

当時の状況をまとめた報告書、そして『古き横浜の壊滅』に掲載された震災写真などが含まれている。

プール家は、エンプレス・オブ・オーストラリア号に救助されたのち、エンプレス・オブ・カナダ号へと乗り換えて、九月四日の早朝に神戸へ向けて出発した。チェスターは翌五日に到着した神戸で下船し、ドッドウエル商会神戸支店の支配人メイの家滞りすが、ドロシーと子どもたちは下船せず、そのまま義弟メイトランドがいる上海へと向かった。

図3は、当時静岡で茶の事業に従事していた父オーガストに宛てて、チェスターが神戸で書いた九月六日付の手紙の控えである。プール家資料には、地震に驚いた父オーガストが、チェスターたち家族を心配して静岡から送つた九月一日付の手紙も残されているが、この手紙がチェスターの手元に届いたのは、震災後の混乱が明けた二月三日のことであつた。

チェスターが父に宛てた手紙には、地震に遭遇してから家族とともに命からがら逃げ延びるまでの緊迫した状況の報告が続いて、社員の安否確認のためにいったん横浜へ戻ろうとする決意が記されている。この手紙のとおり、早々に横浜へ戻ったチェスターは、あらためて地震による惨状を目にするこ



となるが、プール家資料には、このときチェスター本人が撮影したと思われる写真が含まれている。九月上旬の横浜の被災状況を記録したものだとするれば非常に貴重であり、以下、それらの写真から一部を紹介したい。

図4は、イギリス総領事館の構内(当館所在地)から撮影されたもので、正面に焼失した神奈川県庁舎が写っている。二本のヒマヤスギの先には、震災で亡くなった外国人たちが仮埋葬された墓が並んでいる。日



本大通りには敷地に沿って植樹帯が続いていたので、その部分が埋葬地として利用されたのだろう。県庁舎の左には、倒壊をまぬがれた開港記念横浜会館(現横浜市開港記念会館)の時計塔も見える。

図5は、山下町一九二〇番地にあったグラントホテルの状況。倒壊したホテルの残骸を前に、海岸通りを行き交う人びとの姿が写されている。中央に見える塔状のものは、港に停泊する船舶に正午の時刻を知らせる報時球で、フランス波止場内(現山下



公園内沈床花壇付近)に設置されていた。その後ろで燃えている煙から黒煙が上がっている。遠方には、新港ふ頭の煉瓦造倉庫(現赤レンガ倉庫)が確認できる。

図6は、倒壊したドッドウエル商会の社屋。周りの建物がすっかり崩れてしまい、「わが社の正面階段のところから港にいる船がみんな見えた。」(『古き横浜の壊滅』)という。チェスターは日本人の役員たちと落ち合い、焼け残った記録類がないか掘り出そうと試みるが、何ひとつ成果は得られ



なかった。このあとチェスターは山手の自宅へ向かったが、当時プール一家が暮らしていた山手町六八番地の住まいは、跡形もなくなっていた(図7)。山手では、斜面地に造成された宅地の地滑りも被害を大きくした要因のひとつであった。

その後二〇カ月にわたって、神戸を拠点に会社の再建に向けて奔走したチェスターは、一九二五(大正二四)年七月七日、三か月の休養を取るため、家族とともにエンプレスオブインディア号で、カナダのプリティッシュニコロンビア州に向かった。その後、ドッドウエル商会のニューヨーク事務所を引き継ぎ、さらにはアメリカ・カナダの総支配人となつて、横浜へ戻ることなく、アメリカで生涯を終えた。

(青木祐介)

掲載資料はすべてリチャード・A・プール氏寄贈／当館所蔵

図版・・

- 1 O・M・プール肖像一九五七(昭和三二)年
- 2 震災前のドッドウエル商会
- 3 チェスターが父親に宛てた手紙(控)
一九二三(大正二二)年九月六日
- 4 イギリス総領事館構内から神奈川県庁を望む 一九二三(大正二二)年九月
- 5 グランドホテル前の海岸通り
一九二三(大正二二)年九月
- 6 ドッドウエル商会社屋の残骸
一九二三(大正二二)年九月
- 7 プール家があった山手六八番地
一九二三(大正二二)年九月

関東大震災後の 横浜連合婦人会による 罹災者救護活動

本年は一九二二（大正二）年九月一日に発生した関東大震災一〇〇年にあたる節目の年である。本震災によって、震源地に最も近い大都市である横浜は三万五千棟を超える家屋が倒壊・焼失し、約二万六千人もの死者・行方不明者を出す被害を受け、壊滅状態となった。

震災後、膨大な数の罹災者救護に大きな役割を果たしていたのが、民間の諸団体である。本誌第一五三号では、その概要を記したが、本年、横浜の婦人団体の震災時における救護活動の詳細を把握できる資料が、当館に移管されることとなった。そこで本稿では資料から得られる震災後における婦人団体の活動について紹介する。

新たに当館へ移管される資料は、一九二三年に結成された横浜連合婦人会（以下、婦人会）が作成した「婦人会館史」（以下「会館史」）である（図1）。本冊と別冊の二点からなる本資料には、婦人会の結成の経緯や年表、会員の回顧録などが記されており、大正期から戦前にかけての婦人会の活動内容を詳しく知ることができる。本資料は婦人会が一九二七（昭和二）年に建設した横浜連合婦人会館の流れをくむ（公財）横浜市男女共同参画推進協会・男女共同参画センター横浜南（フォーラム南太田）の職員によって、二〇一九（令和元）年に同館のキャビネットの中より発見されたものである。発見時にはその資料的価値の高さから、神奈川・毎日・東京新聞など複数のメディアによって紹介されている。フォーラム南太田では本資料の書籍化のために寄付を募り、二〇二二（令和四）

年に江刺昭子監修『横浜連合婦人会史100年のバトンを受け取る』として刊行されるに至る。その後、フォーラム南太田より恒久的な資料保存が可能である当館に原資料の保存を依頼され、現在、移管手続きが進められている。

明治期より横浜にはキリスト教徒・仏教徒による団体や、軍事援護を目的として結成された団体など、複数の婦人団体が存在していたが、これらの団体が結束して活動を行う契機となったのが、関東大震災である。「会館史」にはこの経緯について以下のように記されている。

大正十二年九月一日の関東大震災によ



図1 (左)「婦人会館史(本冊)」、(右)「婦人会館史(別冊)」

れる当横浜市の惨状は真に語るに言葉なく罹災民の窮状は、我等繊弱き婦人をして遂にこれが救済事業のため団結して立たしむるに至れるなり。

即ち同年十一月二十五日、市内二十有余の婦人団体が新たに横浜連合婦人会なるものを組織して婦人の立場より救護及び復興事業に当らんことを期す。

先づ食品衣類の配給より失業者の救済、児童の栄養品給与、市内の清潔衛生等に関して、極力奔走、宣伝努力したり。また、罹災民の慰安、復興に向ひたる市内中学校教育奨励の問題等にも心をを用ひたり。

ここでは、震災発災約二ヶ月後の十二月に婦人会が発足し、多岐にわたる活動が展開されたことが記されている。各婦人会が結集した経緯については、「会館史」所収の回想録において婦人会評議員の佐藤ヤスが以下のように記している。

横浜連合婦人会の誕生は震災の直後であります。

「連合婦人会は天幕の中から生れた」とよく申しますが実にその通りで、市内太田町に基督教女子青年会があつて、その焼跡に集合して出来たといふ事であります。それ迄は市内に仏教婦人会、基督教婦人会、看護婦会、女教員会などの会が各々その目的に向つて聚力を集めて活動して居たのであります。此曠古の大災難を切り抜けるには、多数の力を集めなければならぬと言ふ事を痛感し



図2 横浜連合婦人会の活動拠点となった横浜YWCA仮設テント 1923年(大正12) 『よこはまを生きる女たち』刊行委員会編『よこはまを生きる女たち』(横浜市婦人会館、1990年)所収



図3 寿小学校での物資配給の様子。物資の配給には多くの女性たちが尽力した。1923年(大正12)前川謙三撮影、当館蔵

たのであります。

佐藤の回想にある通り、婦人会の活動拠点は横浜基督教女子青年会(横浜YWCA)が設けた中区太田町五丁目(仮テント内)にあり、二十余りの婦人団体が救護活動に取り組んだ(図2)。震災直後から各婦人団体は各自で救護活動に取り組んでいたと推測できるが、その力を結集させる必要を感じたため、

婦人会が結成されたものと考えられる。「会館史」の年表には、婦人会による救護活動内容が詳述されている。これに依れば、婦人会が取り組んだ最初の活動は衣類その他の寄贈品の配給であり、結成翌月の二月の活動として「全市を十区に分ち、各区に方面委員を挙げ、罹災市民の調査を開始し、該調査に基く報告カードにより前後五回に亘り老人子供或は病人貧困者に対し衣類其他の寄

贈品を配給す」と記されている(図3)。本活動について佐藤ヤスは以下のように回想している。

第一の仕事として全国各地から集った慰問品の配給でありました。「中略」其拠で露店で慰問品を区分し、それ／＼届先に指定して「これは孤児院」「これは何所の避難民の小屋」といふ様に三、四日も懸ってやりました。

震災後には、国内外から膨大な数の慰問品が罹災地に届けられたことが明らかになっているが、これらの配分は行政にとつて大きな負担となっていた。婦人会では闇雲に慰問品を配給するのではなく、事前に調査してニーズを把握し、数日間かけて罹災民に必要な品を届けていたのである。婦人会評議員の三宅千代子は、自著において「救助品をえり分けて、洗うもの・つくろうもの・手入れするもの、とにかく清潔にして市内に配ることとなりました」(『思い出は真珠の如く』)と回想しており、単に慰問品を配分するだけでなく、罹災民が快適に使用できるように細やかな気遣いがなされていたことがわかる。

次いで婦人会が取り組んだのが、震災によつて職業を失った罹災婦人に対する経済的支援であった。その内容は、年表に依れば、①「罹災に依る失業婦人の救済策として個別的に職業を紹介し、斡旋、就職せしむ」、②「婦人内職としてネル布を大量購入して下着類の裁縫に従事せしめ、賃金を支払ひ、該製品はバザーを開催して販売す」、③「寄贈蒲団の仕立に従事せしめ、賃金を支払う」の三項目であった。この取り組みからは一時しのぎ的な義捐金贈与等の経済支援ではなく、職業斡旋や製品販売などで罹災婦人を支援しようとしていた婦人会の意図が窺える。ここでは、バザーが開催されたことが記されているが、婦人団体によるバザー行事は震災前から横浜で行われており、震災後も婦人会の重要な行事として継続してゆくことになる。

このほか、二月の活動として「母乳不足の乳児を調査し、練乳の配給をなし、相当長期之を継続せり。後神奈川乳児保護協会を組織せしめ、該事業を譲渡せり」と記録されている。震災によって生じたミルク不足は乳幼児の保護にとつて深刻な課題であり、当時横浜家庭学園の園長であった黒川直胤と妻のフシは、婦人会と同じ横浜YWCAの仮テント内を拠点として市内や県内各地の乳幼児に練乳を届け、多くの乳幼児を救った。この事業にも婦人会の会員たちが深く関わっていたことが推測できる。この後、翌年二月に黒川夫妻によって神奈川県乳児保護協会が設立され、戦前や戦後混乱期の乳児保護に大きな役割を果たし、現在でも社会福祉法人として活動を継続している（『乳幼児の福祉を求めて四十年』）。

婦人会の震災救護活動は震災翌年も行われている。年表には一九二四（大正三）年一月の活動として、「市内小学校児童中栄養状態の極めて不良なる平沼、隣徳両小学校に対し給食を実施し、該費用に充当する寄附金を募り、本会委員交代にて炊事に当り感謝せられしが、其結果亦頗る良好なり」と記録されている。私立学校の平沼、隣徳小学校は貧困層の児童を対象とした学校であった。震災によって両校に通学する児童の家庭における経済状況がさらに悪化し、十分な栄養が採れない事態となっていたことが想像できる。これらの児童に対し

震災に次ぎ市内に疫病流行せるも未だ市の下水復工せずして不潔を極めしかば、市民の注意を喚起するため御成婚の佳日〔筆者註…皇太子（のちの昭和天

災後初めての 大音楽會

鈴木信子女士

ウエルクマーステル教授出演
来る十四日一中に於て

この広告は、1924年6月6日付の『横浜貿易新報』に掲載された。中央には鈴木信子女士の肖像画があり、その周囲には「災後初めての 大音楽會」と題しての告知文が記されている。文中には、震災後の初めての音楽会として、ウエルクマーステル教授の出演が予定されていることが伝えられている。また、この音楽会が、市内の不潔な場所を調査し、該方面のバラック住宅を歴訪して「綺麗にし、お祝ひ致します」の申合せをなすという、市の衛生講話と連動していることが読み取れる。

図4 1924(大正13)年6月6日付「横浜貿易新報」

ここでは、疫病対策のための衛生意識を喚起する運動を婦人会が行っていたことがわかる。震災後、罹災民のために急造されたバラックでは、糞尿や塵芥の処理が間に合わず、不衛生な状況が生じていた。また、上下水道が破壊されたことにより、病原菌が含まれた井戸水を飲んで腸チフスに罹患する市民も存在し、県や市の衛生課職員たちは、バラック施設・設備の改善や、清潔な水の供給など、様々な課題に直面していた（『神奈川県震災衛生誌』）。このような公的機関の補助的役割を婦人会が果たしていたことが窺える。

婦人会の活動は、罹災者の精神的なケアにも及んでいた。年表には六月に「震災による人身の荒廃せるを慰めんため大音楽会を催し、鈴木のおぶ女史、ウエルクマーステル氏を招き、盛会なり。震災後、最初の音楽会なり。」と記されている。この音楽会は当時の横浜市でも大きな話題となり、『横浜貿易新報』紙上でも、複数回記事が掲載されている。一九二四年六月六日付の記事「災後初めての音楽会」では、婦人会会員が記した音楽会開催までの経緯が以下の通り掲載されている（図4）。

恐ろしい地震と火事に次で悲しい慟哭の声、続いて復興への血走った活動、何といふ痛ましい月日が続いたことでせう。かくて荒みきった魂はいつともなしに宥めてくれるもの、元気づけてくれるもの、例えば静かな音楽のやうなものを求め持がれていました。過ぐる日さうした心持を鈴木のおぶさんに書き送りました。

と直に鈴木さんから横浜の方々のために歌ってあげたいといふこと、及び伴奏にはセロのウエルクマイステルさんが東京の方で頼まれた演奏をお断りになって、お出で下さる由の御返事が参りました。然し会場のないことや、現在の横浜の状態を顧みれば幾度か躊躇したのですけれど、遂にお二人の御好意を心から感謝した受ける事に決心し、同時に多くの好楽家の方々のために出来るだけの御便宜を計らうといま私たち連合婦人会のものは一生懸命働いています。会場は県立第一中学校(市電藤棚下車坂上約二丁)で、時日は六月十四日土曜日午後三時開演の予定です。

本記事では、地震や復興活動で荒んでいた市民の心を癒そうと、婦人会が音

けふ鈴木信子女史

獨唱會 午後三時

一 中講堂

十六の曲目何れも女史得意のもの

横濱聯合婦人会主催の鈴木信子女史獨唱會は、六月十四日午後三時から、縣立第一中學校の講堂に於て開催せられる。其曲目は、ルツケルトの戀人に捧げる歌に始まりてマルテン、ペーリツツのマリアの子守歌に終る十六編、いづれも鈴木女史の最も得意とする作品であつて何れ一つ聴き洩らしたく無いものありである。中にもハイネの影の如き會て戀人の住めりし街に夜更けて瀧り淋しく彷徨ひつゝ、個ましき己の姿をはかなみて絶えがたき想ひに耽る一篇は聴者を動かさずには置かないもの、一つであらう、當日の助奏はウエルク、マイステル教授で唱者との呼吸もピッタリと合ひ會衆に満足と興へることは疑ひ無い、會費は三圓、二圓、一圓の三種に分れて居る。

図5 1924(大正13)年6月14日付「横浜貿易新報」

楽家と交渉して音楽会を開催しようとしていたことがわかる。音楽会開催にあつた最大の障害は会場となる建物が焼失・倒壊していることであつた。本記事の末尾には「記念会館も焼けて横浜市に公会堂が無い時に、神中のやうな公立の学校が進んでその建物の一部でも開放して下さつたことを有難いと思ひます」という謝辞が記されている。会場となつた神奈川県立第一横浜中学校(現神奈川県立希望ヶ丘高等学校)は、震災によつて半壊したものの焼失を免れたために多くの罹災民が避難した一大救護拠点であつた(『横濱震災誌』第三冊)。校舎の応急修理は一九二三年三月に終了したことが記録されているが、依然、校庭にトラックが建ち並ぶ状況下にある本校の協力によつて、音楽会が開催可能となつたことが推察される。本音楽会の内容は、一九二四年六月二日日付「横浜貿易新報」の一面記事「けふ鈴木信子女史獨唱會」で以下のように告知されている(図5)。

横濱連合婦人会主催の鈴木信子女史獨唱會は、六月十四日午後三時から、縣立第一中学校の講堂に於いて開催せられる。其曲目はルツケルトの戀人に捧げる歌に始まりてマルテン、ペーリツツのマリア

の子守歌に終る十六編、いづれも鈴木女史の最も得意とする作品であつて何れ一つも聴き洩らしたく無いもの計りである、「(中略)當日の助奏はウエルク、マイステル教授で唱者との呼吸もピッタリと合ひ會衆に満足と興へることは疑ひ無い、會費は三圓、二圓、一圓の三種に分れて居る。

横浜連合 婦人会館史

100年の バトンを受けとる



図6 「横浜連合婦人会館史 100年のバトンを受けとる」表紙、本書は(公財)横浜市男女共同参画推進協会の公式ウェブサイトにて閲覧可能。

鈴木信子は海外での公演経験を持つ著名な声楽家であつた。伴奏のハイリヒ・ウエルクマイスターも東京音楽学校(現東京藝術大学)で教鞭をとつた有名な音楽家であり、震災以来となるハイレベルな音楽を多くの市民が楽しんだことが想像できる。婦人会が震災後の横浜における文化復興の一翼を担っていたことを示す取り組みといえるだろう。

以上のように、震災後に発足した婦人会は罹災民救護のために諸種の取り組みを行い、多くの市民を救護した。婦

人会による婦人団体間の連帯は震災後も継続され、一九二四年六月に婦人会館建設を計画し募金運動を開始する。一口十銭の募金を婦人会員が全市をまわつて集め、一九二七年五月七日に中区(現西区)宮崎町に横浜連合婦人会館が開館する。この会館を拠点として婦人会ではその後も様々な活動が展開されたが、詳細は別稿に譲りたい。

今回移管される「会館史」には戦前の横浜市における婦人団体の活動に関する貴重な情報が多く含まれている。先述の通り既に活字化されている資料であるが(図6)、当館では原資料を撮影し、来年公開予定のデータベースで閲覧できるように準備中である。本資料が多くの方の目に触れられることを期待している。

(西村 健)

関東大震災を 伝える 通信社配信の 災害写真

写真は被写体の情報を見る人に伝える。関東大震災時の被災地を撮影した写真、さらにそこから生み出された絵葉書は今日も数多く残っており、二〇〇年前の悲惨な状況を現在に伝えてくれている。ただし、本誌第二五二号でも述べた

【図I】大阪電報
通信社のスタンプ



【図II】帝通写真部
のスタンプ



ように、撮影者の特定できる写真は少なく、①いつ、②どこで、③何のために撮影したのか、それらが判然とするものはほとんどない。また、伝播の過程で加工が加えられた写真や、誤った情報で伝えられた写真も多く、批判的な検証作業も必要である。

さて、多くの人がカメラ付携帯帯を持ち歩く現在と異なり、大正時代、カメラを所有する人間は限られていた。それゆえ、関東大震災を撮影したのは、新聞社の社員か、街の写真師、官公庁の写真技師、そして写真を趣味としたアマチュアカメラマンなどであった。そうしたなかで、全世界に被災地の写真を伝えたのが新聞社等にニュースを提供する通信社だった。横浜開港資料館には、その過程を示す資料が眠っている。今回は通信社の配信した災害写真を事例に、関東大

震災における情報伝播の過程を紹介していきたい。

通信社配信の災害写真

二〇二四(平成二六)年八月、横浜開港資料館は高知県立坂本龍馬記念館の館長であった森健志郎氏から読売新聞社を通じて、九八点の関東大震災写真の寄贈を受けた。複数の人の手を経ているため、詳しい来歴は不明だが、裏面に「九九(七四のみ一枚欠)までの番号が付されているほか、写真帳から剥がした痕跡も確認できた。また、一部の写真には、【図I】の「大阪電報通信社写真部」や、【図II】の「帝通写真部」などのスタンプ、「五面三ダン」などの指示もあり、これ

らから西日本の地方新聞社がかつて所有していた写真だと推定できる。

重要なのは、写真の撮影者と配信元である。一九二二(大正二二)年六月刊行の『新聞総覧』(日本電報通信社)によれば、当時、東京には日本電報通信社(以下、電通)のほか、帝國通信社、自由通信社、東方通信社、国際通信社などの通信社があった。そのうち電通は大阪支局として大阪市北区中之島三丁目に大阪電報通信社を開設しており、大阪支局は関西方面を中心に、中国、四国、九州、さらに朝鮮半島や台湾、満州などにもニュースを配信していた。「大阪電報通信社写真部」の写真は、主に東京の本社から大阪支局を介して配信されたものである。

一方、「帝通写真部」のスタンプがある写真は、東京市京橋区山下町に所在し



【図III】大阪港に入港した「ろんどん丸」



【図IV】新吉田川周辺の被災状況 日本電報通信社撮影



【図V】西戸部町から横浜駅を望む 日本電報通信社撮影

た帝国通信社（以下、帝通）のものである。電通の創業が一九〇一（明治三四）年なのに対し、帝通の創業は一八九三年と古く、国内通信社の草分け的な存在だった。ただし、当時、写真部は東京になく、大阪を拠点に活動していた（不動健治『写真遍歴七十年』同盟写真部同人会、一九七〇年）。

新聞社と通信社の活動

一九二五（大正二四）年三月のラジオ放送開始以前は、新聞が速報性のある唯一のメディアだった。東京と大阪の両方に拠点を持つ朝日新聞社（『東京朝日新聞』・『大阪朝日新聞』）や毎日新聞社（『東京日日新聞』・『大阪毎日新聞』）など、大手新聞社だけでなく、全国には数多くの地方新聞社もあり、日々読者に様々なニュースを伝えていた。ただし、すべての新聞社が情報を掌握できたわけではなく、資本力の弱い新聞社は取材できる範囲に限界があった。この穴を埋めるのが通信社の役割である。

一九二三年九月一日午前二時五八分、神奈川県を震源とするマグニチュード七・九の地震が発生、激震と火災によって横浜市内の新聞社はすべて壊滅、東京市内でも無事だったのは、『東京日日新聞』、『都』、『報知』の三社のみであった。そうした状況に大阪に拠点を置く朝日と毎日には取材合戦を展開、四日には写真付きの号外を発行する。また、地方新聞を含めた他社も京浜地域に特派員を派遣するが、交通機関の断絶によって東へ進むことはできなかった。関西方面の新聞社の多くは、東海道本線の通る沼津周

辺で足止めを受けた。

そのような状況下、東京の通信社は情報を配信するために動き出す。電通の社屋は震動に耐えたものの、大火災によって焼失、九月二日、社長の光永星郎は社員とともに帝国ホテルに仮事務所を設けた。当時、中央新聞社（東京市京橋区城山町）に位置した電通写真部は、近くの水路にあった小船に写真機等の機材を避難させ、火災の難を逃れている。部員たちはその機材を活用しつつ、横浜方面を含め、被災地の状況をカメラに収めていった（日本電報通信社編・発行『電通社史』一九三八年）。

一方、帝通も電通と同様に本社を失い、無事だった報知新聞社に仮事務所を設置する。ここで活躍したのが不動健治の率いる写真部であった。大阪にいた不動は関東地方での地震発生の情報を得ると、持てるだけの機材を担いですぐに東京をめざした。途中、静岡で動けなくなるが、清水港から芝浦へむかう救援船に乗ることができ、九月三日夕刻に東京に到着する。その後、不動は被災地の写真を撮り続け、資材がなくなると大阪に戻り、再び東京をめざした。こうした通信社の写真が関西方面、さらに西日本へ伝わっていく。

新聞に掲載された写真

写真裏面のスタンプは電通（大阪電報通信社）、帝通ともに直径約三・五センチの円形で、前者が紫色、後者が赤色のインクを使用している。また、「大阪電報通信社写真部」と文字のみのスタンプも確認でき、電通は二種類の印を用いてい

た。円形のスタンプで特徴的なのは、会社名と所在地、さらに配信日が示されている点である。

九八枚中、電通配信の写真は二五枚あり、そのうち最も古いのは、九月五日に配信された四枚、一方、帝通配信の写真は二六枚あり、最も古いのは九月八日の二枚であった。電通写真の配信経路は判然としないが、不動の回想によれば、自身は東京から北陸経由で大阪に戻っており、帝通写真は陸路で関西方面へ伝わったと考えられる。また、通信社のスタンプはないものの、写真群には、九月六日に大阪港に入港する「ろんどん丸」船上で撮影された写真（図Ⅲ）もある。

電通・電話網が崩壊するなか、被災地の情報は陸路や海路を通じて大阪へ伝わった。当然、【図Ⅳ】や【図Ⅴ】のように、横浜の写真も報じられていく。

関西方面の地方新聞、例えば、『京都日出新聞』や『神戸又新日報』などを確認すると、九月七日以降、通信社配信の写真に掲載しているほか、『大阪毎日新聞』も通信社配信の写真を使用していた。問題なのは、同じ写真でも異なる説明がなされている点である。例えば、【図Ⅵ】について『大阪毎日新聞』は、「田端駅付近の徒歩連絡」（九月九日号外／二面）、「停車場に急ぐ避難民（品川駅付近）」（九月一四日／八面）と、同じ新聞社でも全く異なる説明を加えている。

また、『京都日出新聞』は「汽車不通のため徒歩連絡の旅客（沼津駅付近）」（九月二日／一面）、『神戸又新日報』は「赤羽付近徒歩連絡」（同）としている。撮影場所は地形や家屋の残存状況等から考えて、田端駅周辺だと推察できる。

このように災害写真が広がっていく過程で、誤った説明が加えられる場合もある。今後も慎重な検証作業を重ねながら、さらに災害写真の体系化を進めていきたい。

（吉田律人）

※災害写真の研究にあたっては、写真編集者の沼田清氏から大変有益な情報をご提供いただいた。また、本稿は公益財団法人横浜学術教育振興財団二〇二〇年度研究助成の成果の一部である。ここに記して謝意を表します。



【図Ⅵ】線路上を歩く人びと 日本電報通信社撮影



PORTER'S LODGE



横浜開港資料館 PORTER'S LODGE オープン



七月一日、約二年にわたる改修工事等を経て、横浜開港資料館の旧英国総領事館（横浜開港資料館旧館）付属棟に当館のミュージアムショップ&カフェのPORTER'S LODGE（ポーターズロッジ）がオープンしました。

この付属棟は、昭和六（一九三二）年に竣工した英国総領事館の門番所として建てられた建物で、平成二二（二〇一〇）年に「横浜開港資料館旧館（旧横浜英国総領事館）及び旧門番所」として横浜市指定文化財となりました。

店舗の名称となっている「PORTER'S LODGE」は、昭和六年の竣工にあたって作成された「英国総領事館関係建築図面」に書き込まれた、建築当時の建物名称です。今回の店舗オープンにあたり、当時の手書きの図面からロゴを作成しました。「横浜開



一部商品はオンラインショップでも販売しております。

港・英国文化を伝えるセレクトショップ」として、横浜中華街や元町商店街、山下公園通りで営業する店舗などから、横浜の歴史を伝える商品などを仕入れて販売するほか、旧英国総領事館や英国文化を伝える商品、横浜開港の歴史を伝える資料館所蔵資料を活かしたオリジナル商品を開発販売し、ペリーが上陸した開港の地横浜の原点から、ミュージアムショップ（買う）、カフェ（味わう）の機能を通じ、山下公園通り・横浜中華街・元町商店街といった伝統的な横浜の観光地へのコンシェル（導く）を実現します。

ご来館の際は、ぜひお立ち寄りください。スタッフ一同お待ちしております。

館蔵ステレオ写真を復刻しました



ビューワーは別売りとなります

令和五年一月から開催した特別展「幻の写真家 チャールズ・ウィード 知られざる幕末日本の風景」の開催に合わせ、横浜開港資料館が所蔵する江戸時代末のステレオ写真を復刻しミュージアムショップやオンラインショップでの販売を開始しました。

ステレオ写真というと、赤と青のセロファンを貼ったメガネを思い出す方も多いと思いますが、今回の復刻ステレオ写真は透明の凸レンズを使った市販のビューワーで手軽に見ることが出来ます。

日米和親条約の締結以降、江戸時代末から横浜開港後の明治時代初頭、日本という国やそこに暮らす人々について海外の方々の注目が集まりました。そうしたニーズにこたえるために、当時、土産物として多くの写真や絵葉書が作られました。が、今回のステレオ写真はまさにそうした当時の外国人が見た横浜の風景を復刻したものに なります。

現代の横浜に関するさまざまな情報はSNSやインターネット上にあふれ、多くの方が利用されていますが、本作品を通じて、時空を超え江戸時代末の横浜をご覧頂き、当時の外国人が見た風景を、当時と同じ方法でお楽しみいただければ幸いです。

（羽毛田智幸）

閲覧室より

◆古文書(こもんじょ)とは？

横浜開港資料館(以下、当館)の閲覧室では、古文書を手に取って閲覧することができます。古文書とは、一般的に古い文書全般を指しますが、古文書学においては差出人・受取人・日付・用件などを備えた文書と捉えるのが基本的な考え方になります。一方、受取人が存在しない古い日記や編纂物などは「古記録」と呼ばれ、「古文書」と区別されます。しかしながら、他者に読まれることを前提に書かれた日記などには事実上、差出人(書き手)と受取人(読み手)が存在しますから、古文書と古記録の線引きは必ずしも明確ではありません。そこで本稿においては古記録も古文書の中に入れて叙述していくことにします。

古文書は当館が収蔵する資料のうち大きな割合を占めています。古文書を「死蔵」することなく、広く活用にするため、閲覧室ではその一部を公開しています。当館の閲覧室は一般図書・雑誌だけを公開する窓口ではないのです。

ただし収蔵しているすべての古文書を公開しているわけではありません。整理中のもの、展示や調査などで活用中のもの、修復中のもの、破損・汚損・虫損など痛みが激しいもの、損傷するリスクが高いものなどは閲覧を停止していますので、利用に際しては予めご承知置きください。

◆古文書の閲覧請求と取扱い

当館では主に諸家文書(市内の旧家・会社や、市外の横浜に関係の深い個人宅に残された歴史資料)、館蔵諸文書(開館後に購入した歴史資料など)として古文書を整理しています。

諸家文書と館蔵諸文書に含まれている古文書の詳細は閲覧室に配架してある文書目録で確認できます。文書目録には古文書が伝来した家や組織別に、請求番号・資料名・内容・年代・差出人・受取人・形態・数量などの情報を記しています。

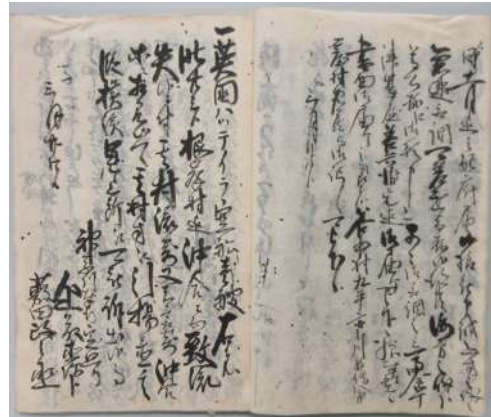
まずは文書目録をめくり、閲覧請求する古文書を選定してください。その上で「入室・閲覧票」(入室時にお渡しします)に請求番号・資料名をご記入の上、受付カウンターへご提出ください。

古文書の閲覧、取り扱いに関してはいくつかの注意点があります。手の爪を短く切り揃え、マニキュアやネイルチップなどは付けず、事前に手を洗い、ネックレスや指輪などの装身具、腕時計などは外すといったことです。閲覧室内での飲食やボールペンなどの使用は厳禁です(鉛筆使用可)。

◆浜田家文書が語る幕末の横浜

諸家文書の中には浜田家文書という資料群があります。武蔵国久良岐郡森公田村(現横浜市磯子区)の名主・戸長を務めた浜田家に伝来したものです。安政6(1859)年6月2日に横浜が開港すると、その近郊に位置する森公田村には開港場運営に関する様々な廻状・触書が伝達されることになりました。主として領主・代官が支配下の村々に出した廻状・触書などを村役人がまとめた帳面を「御用留」(ごようどめ)といいます。浜田家文書には「廻状留」「御用廻状留」「御解書写」と題する御用留が計12点(文久3年から明治3年まで)残されています。

ここでは浜田家文書追加No.169「御用廻状留」に収録されている廻状をひとつ取り上げ、書き下し文と現代語訳を掲げておきます。



浜田家文書 追加No.169「御用廻状留」文久4(1864)年 横浜開港資料館所蔵

【書き下し文】

一、英国ハツテイラ空船壹艘、右は昨廿三日根岸村までの沖合にて流失致し候に付き、其の村流れ寄り、又は最寄沖合等に相見え候はば、其の村方え引き揚げ置き、其の段横浜運上所え訴え出でらるべく候事

子 神奈川奉行定廻り
三月廿四日 近藤直次郎
藪田政之丞

【現代語訳】

一、イギリスの空のバッテリー(ボート)一艘が昨二十三日、(横浜開港場から)根岸村までの沖合において流失したので、村に流れ着いたり、または最寄りの沖合などで発見したならば、村に引き揚げ、そのことを横浜運上所へ訴え出るようにすべきこと。

子 神奈川奉行定廻り
三月二十四日 近藤直次郎
藪田政之丞

これは横浜開港場や村方の取締などを担当した神奈川奉行所の定廻りという役職の近藤直次郎と藪田政之丞が出した元治元(1864)年3月24日付の廻状です。横浜が開港して5年が経過しようとしていた頃ですから、横浜近海には外国船が日常的に来航するようになっていきます。どのような事情か判然としませんが、イギリス艦船搭載のボートが海上に流失してしまいます。そこで開港場近郊の森公田村にこの廻状が送られてきたのです。森公田村では廻状を隣村に送付するとともに、その内容を「御用廻状留」に記録しました。廻状ではボートを回収できた場合、横浜運上所に報告するようにと指示されています。横浜運上所は現在の神奈川県庁本庁舎一帯に置かれていた貿易事務を統括する役所ですが、商取引だけでなく、海難による流失品や漂流人の保護なども担当していました。横浜開港は様々なかたちで周辺地域に影響を及ぼしていたのです。

開館以来、当館が力を注いできたのが閲覧業務の充実です。「資料館」としての機能をより一層充実させるため、館員たちは努力を積み重ねています。古文書の閲覧を通じて歴史の臨場感を体験してみたいはいかがでしょうか。

(神谷大介)



特別展

横浜開港資料館・横浜都市発展記念館
合同特別展

「関東大震災100年 大災害を生き抜いてー 横浜市民の被災体験 ー」

会期: 2023年8月26日(土)~12月3日(日)



●10月以降の展示関連企画

○展示解説

日時: 10月14日(土)、11月11日(土)、
12月2日(土)各日とも13:30~(30分
程度)

○ガイドツアー〔事前申込〕

日時: 10月18日(水)、10月28日(土)、
11月3日(金祝)、11月21日(火)

申込・詳細は、横浜シティガイド協会
ホームページをご覧ください。

○ミニ展示コーナー

会場: 横浜開港資料館2階 ミニ展示

「古き横浜の壊滅 O.M. プール旧蔵資料
より」

開催期間: 8月26日(土)~11月30日
(木)

「丹沢地震100年」

開催期間: 12月1日(金)~2024年2
月15日(木)

○関連書籍好評発売中

「関東大震災100年 関東大震災と横浜
一 廃墟から復興まで」

A4判80ページ 2,200円(税込)

関東大震災90年を期に刊行した同書
を特別展にあわせて増補改訂しました。

オンラインショップは
こちらから



連続講座2023

当館の調査研究員が横浜の近代史に
関するさまざまなテーマでお話します。
〔事前申込〕

◆第3回 2023年11月3日(金祝)

「幕末台場ー海防の拠点を探るー」
講師: 神谷大介

◆第4回 2023年12月9日(土)

「日米修好通商条約はどこで結ばれたのか?」
講師: 吉崎雅規

◆第5回 2024年1月20日(土)

「横浜開港初期の外国人たちー開港地
をめぐる対立からー」
講師: 白井拓朗

終了した講座はアーカイブ配信を行って
います。◆第1回「関東大震災100年 都
市横浜の壊滅と復興」講師: 青木祐介
◆第2回「戦争被害者救済に尽力した
横浜の社会事業団体」講師: 西村健
詳細・お申込は、ホームページをご覧ください。

寄贈資料

- ・井野写真館資料 48点(井野慎司氏)
- ・木製アイスクリーム製造機 1点(山田
泰彦氏)
- ・佐藤謙三文書 314点(脇屋まり氏)
- ・鈴木信貴家文書 68点(鈴木信貴氏)
- ・イギリス領事館プレート 1点(David
Baillie氏)
- ・絵葉書「横浜公園 Yokohama
park」1点(定森好美氏)
- ・冊子『イデス・ルーサ・レイシー夫人を
記念して』昭和14年(1939)1点(吉川
敦氏)

- ・復旧記念鉄の橋(1978年3月)1点
(伊藤一義氏)
- ・「R.H.プラントンに関する調査研究
報告書」(平成2年)1点、平成3年度
プラントン記念碑設置事業竣工書類1
点、「RHプラントン生誕記念150周年
記念」テレホンカード、「第43回灯台
記念日」テレホンカード(親松俊彦氏)
- ・R.H.プラントン生誕150周年記念事
業関係資料〔一式〕8点(金近忠彦氏)
- ・〔記念品〕吉田橋模型1点(秋山敬史氏)
- ・絵葉書・プロマイド写真 215点(押田
麻衣子氏)
- ・椎野佳宏家資料 2点(椎野佳宏氏)

PORTER'S LODGE オープン!



PORTER'S LODGE

開港広場側にある、旧英国総領事館
付属棟が、ミュージアムショップ・カフェ
「PORTER'S LODGE (ポーターズ
ロッジ)」として新たにオープンしまし
た。営業時間: 9:30 ~ 17:00 (カフェラ
ストオーダー 16:30)、お休みは開港資
料館に準じます。

『横浜開港資料館ロゴ』が 新しくなりました!

横浜開港資料館(旧館)とたまくすの木



横浜開港資料館 利用案内

*今後の状況により変更する場合があります。最新情報は、当館ホームページ・お電話でご確認ください。

開館時間 9:30~17:00(入館は16:30まで)

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始ほか

入館料 一般200円 小・中学生/横浜市内在住65歳以上100円

*特別展「関東大震災100年 大災害を生き抜いて」会期中
一般500円 小・中学生/横浜市内在住65歳以上250円

閲覧室の利用について

事前予約制(先着順)です。閲覧希望日前日(の開室時間中)までに、電話で予約してください。

開室時間 10:00~12:00 13:00~16:00

休室日 月曜日・火曜日(祝日の場合は翌日)、資料整理日、年末年始ほか

利用料 100円(閲覧室のみご利用の場合)

電話番号 045-201-2150(直通)

アクセス

- ・みなとみらい線「日本大通り」駅4番出口から徒歩2分
- ・JR関内駅(南口)、市営地下鉄関内駅から徒歩約15分
- ・JR桜木町駅から市営バス「日本大通り駅南前」
下車、徒歩1分

ホームページ

<http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>

twitter @yoko_archives

管理運営団体 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

